

## 月の花挽歌 ～5.裸のマハ～

### 5-1 2

ショパンの豊穡な音楽性を内在して結実した作品『バラード第一番』は、極上ワインのオーパス・ワンの名前(音楽用語で作品番号第一番の意味で、一本のワインを交響曲に、一杯のワインをメロディーにと喩え、創業者のひとりが命名)の由来に、横田の強い思い入れをダブらせた選曲である。

ソナタの第一楽章の形式におおよそ基づいている『バラード第一番』は、舞曲風リズムの分散和音による第一主題、幅広い音域に寄り添い涼やかに彩られる明朗な第二主題により展開部に導入され、再現部は第二主題から始まりへと回帰して、モメントが刻々と差し迫るようにリフレインされたのち、八十八の鍵盤の左右をフルに使った見事なパッセージワークで九分三十秒の演奏を終える。

横田はお気に入りの女流ピアニスト仲道郁代の『バラード第一番』を背中で聴きながらロフトの階段を上がっていった。

ベッドに横臥する真紀の悲しいほどにエロティックな姿態を改めて前にした横田は、反射的に創作意欲をかき立てられて、すぐにでも描いてみたいという強い衝動に駆られた。先ほど、ひどくのぼせ上って、「まるで裸のマハだ！」と賛美したことすら忘れていた。今まで何度となく女たちを、「貴女を描いてみたい」とエセ画家まがいの常套句で口説き落としてきたが、瓢箪から駒が出たことはついになかった。あの城山聖子さえもまた然りである。

無論のこと横田クラスになれば、画家とモデルとの間に、神話に近い深淵なる世界が介在しなければ、裸体を芸術的高みに押し上げることはできない位のことには修得しているはずだし、スピリチュアルメッセージをモチーフから受け取れる機会は、不遜かもしれないが、ごく限られて当然だと思う。

二百年ほど前のスペインの宮廷画家がアトリエ灯として用いていたと連想させても不思議ではない和ローソクの灯りに包まれた陰影が潜む異空間で、真紀は濃密な余韻に浸りながら、前触れもなく流れてきたピアノ曲に耳を傾けていた。期待通りの男の仕掛けに「やるじゃない……」と内心でつぶやいた。

上品でバランスが良く、力強さとフィネス(洗練)とストラクチャー(体躯)があり、口当たりと質感が優れているナパバレーワイン『オーパス・ワン』とショパンのピアノ曲『バラード第一番』とチャーホフの短編『可愛い女』とのトリプル共演が功を奏したのか横田の淫乱な眼差しは、手品師の華麗なカードさばきを見せられたように、画家の眼差しに変容していた。